

新潟地方気象台の3か月予報に基づく農作物等の管理対策（第6報）

令和元年9月2日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台から8月23日に発表された「北陸地方3か月予報」によると、9月は平年と同様に天気が周期的に変わり、気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みです（8月29日発表の「北陸地域1か月予報」により平年並から多いに更新）。

10月は気温が高く、降水量はほぼ平年並、11月は気温が平年並か高く、降水量はほぼ平年並の見込みとなっています。

今後の気象変動に十分留意し、下記の管理対策の徹底をお願いします。

記

I 水稲

1 収穫

- (1) 早生や中生品種（コシヒカリやこがねもち）は高温条件で登熟しており、基部未熟粒による品質低下が懸念されるので、出穂後の積算気温のめやすを通常の刈取適期より50℃早めた温度とする。（表1）。
- (2) 収穫適期は、黄化籾割合が85～90%になった頃である。コシヒカリの出穂期は平年より2日早く、出穂後の気温も高く推移していることから、成熟期が早まることが見込まれる。地域の適期収穫情報を参考にするとともに、収穫期間近になったら、ほ場ごとに籾の黄化程度や籾の水分を確認して適期に収穫する。
- (3) 登熟初期が高温で推移したこしいぶきなどの早生品種やコシヒカリは、胴割粒の発生が懸念されるので、刈り遅れに特に注意が必要である。収穫適期を迎えた品種は、晴れ間を逃さず、可能な限り速やかに収穫する。
- (4) また、成熟期頃の籾水分の低い状態でフェーン現象に遭遇した場合は、立毛胴割れが多発する危険があるので、刈り遅れとその後の乾燥調製に十分注意する。

表1 収穫適期のめやす

熟期	品種	出穂後積算気温 (℃)
早生	こしいぶき、ゆきん子舞、五百万石	925
中生	コシヒカリ、こがねもち	950
晩生	越淡麗、いただき	1,000～1,050
	新之助、あきだわら	1,050～1,100

注：出穂後積算気温は、出穂期の翌日から起算している。

注：早生・中生品種（コシヒカリ、こがねもち）は、平温年の積算気温のめやすより50℃早めたものである。

2 乾燥・調製

- (1) 生籾は、籾水分が高いほど、また気温が高いほど変質しやすいため、収穫後はで

- きるだけ早く乾燥機に張り込み、通風する。
- (2) 乾燥速度は、毎時乾減水分0.8%以内とする。早生、中生品種とも出穂後10日間の最高気温がかなり高く推移し、胴割粒が発生しやすい形状であると想定されるので乾燥速度には十分に注意する。成熟期頃のフェーンなどで立毛胴割れが予想される場合は、毎時乾減水分が0.5%以下になるよう送風温度を低く設定する。
 - (3) 高温時に乾燥作業を行う場合は、日中の加温乾燥は避け常温で通風乾燥を行い、夜間に気温が下がってから点火し送風温度を低めに設定する。
 - (4) ほ場段階で18%程度まで籾水分が低下している場合、籾水分のバラツキが大きく乾燥作業により低水分籾が胴割れを起こす危険があるため、張り込み後に軽めに通風循環した後は、夜間まで半日程度貯留して、水分ムラを解消させてから加熱乾燥を行う。乾燥機に2段乾燥機能や休止乾燥機能が備わっている場合には、それを活用する。
 - (5) 倒伏などにより屑米混入の多い高水分籾は、水分18~20%で一旦停止し、半日程度貯留して水分ムラを解消した後、再乾燥を行う。
 - (6) 14%以下の過乾燥になると食味の低下や胴割粒の発生につながり、15.5%以上では保管中にカビが発生する恐れがあるので、仕上げ水分は15%とする。
 - (7) 1.85mm以上のふるい目を用い、適正な流量による丁寧な選別を徹底する。特に、未熟粒や被害粒が多い場合は、1.90mmのふるい目や色彩選別機を活用して整粒歩合を高める。

II 大豆

1 栽培管理

- (1) 大豆は葉が黄化を始めるまで大量の水を吸収するので、適正な土壤水分を保ち、粒肥大の促進を図る。
- (2) 地下水位が60~70cm以下に低下する排水の良いほ場では、土壤水分を逃がさないよう9月中旬頃まで暗きょ栓を閉めておき、降雨等により地下水位が上昇する場合は速やかに暗きょ栓を開放する。
- (3) 排水不良で常に地下水位の高いほ場では、暗きょ栓は開放しておく。
- (4) 株間に残った大型雑草は、種子が結実する前に抜き取りを行う。
- (5) 台風等の大雨に備え、明きょや排水口等の排水経路の点検・補修を適宜行う。

2 病虫害防除

子実害虫のマメシクイガの防除時期はシロイチモジマダラメイガ、カメムシ類等の子実害虫の防除を含め、9月第2半旬までとするが、薬剤の種類によって散布時期が異なるので注意する。

III そば

ハスモンヨトウに対しては、老齢になると防除効果が劣るので、早期防除が重要である。登録薬剤は訪花昆虫に対する影響は少ないが、収穫前日数など使用基準や使用上の注意事項を遵守して使用する。

IV 大麦

1 ほ場準備

- (1) 水稻収穫後、耕起・は種前に早めに排水作業を実施する。周囲明きよ、弾丸暗きよはできるだけ土壌が乾いた条件で施工する。
- (2) ほ場内小排水溝は、施工間隔を3～5 m程度とし、ほ場の排水性に応じて間隔を狭め、本数を増やす。

2 は種

- (1) 少雪地帯（根雪日数60日未満）では9月25日から10月10日まで、中雪地帯（平年：根雪日数60～90日、多雪年：根雪日数90日以上）では9月20日から9月30日までには種する。
- (2) 出芽・苗立ちを安定させるため砕土率を70%以上に高める。数日天気が続き土壌が乾いた状態で作業し、できるだけ耕うんからは種まで連続して行う。
- (3) は種様式は、①生育の均一化、②は種後出芽前処理用除草剤による雑草害の軽減、③コンバイン収穫での収穫ロスの低減などの点で優れているドリル播とする。また、転換畑での湿害防止には畝立ては種が有効である。

V 野菜

1 施設野菜

- (1) 施設栽培では、曇天後に高温・強日射となる場合、着果不良や葉焼け等が発生するため、適宜遮光資材で温度の低下を図るとともに、かん水で草勢を維持する。
- (2) 寒暖の差が大きくなると施設内で結露が発生することから、天候に応じたこまめな換気など、適正な温湿度管理を徹底し、草勢維持及び病害の発生防止を図る。
- (3) 果菜類で草勢が低下している場合は、若もぎにより着果負担を軽減するとともに、液肥等の葉面散布により草勢を回復させる。また、老化葉・黄化葉を中心に摘葉し、水分の蒸発を抑制する。曇天が続いた場合は、灰色かび病などの病害が発生しやすくなるため、ほ場巡回を徹底して発生状況に応じた迅速な防除を行う。
- (4) いちごでは、定植時にうどんこ病をハウス内に持ち込まないよう、育苗床での防除を徹底する。また、高温が続くと花芽分化が遅れるおそれがあるため、花芽分化の確認を行った上で定植時期を決定する。

2 露地野菜

- (1) 定植したキャベツ、ブロッコリー、カリフラワー等は、秋雨期に排水不良とならないよう明きよを設置する。ブロッコリーの黒すす病は、排水不良や過繁茂のほ場で降雨・強風条件となると発生するため薬剤防除を徹底する。
- (2) アスパラガスは、秋雨期に入ると斑点病や茎枯病などが増加するため、降雨後の速やかな防除を徹底する。夏・秋芽の収穫を行っていないほ場では、今後発生する若芽を早めに間引き、過繁茂防止及び通風改善に努める。
- (3) 夏ねぎでは軟腐病の発生が見られることから、出荷時に腐敗株の除去を徹底し、皮むき後はとろみを十分出し、扇風機等で茎盤部を乾かしてから箱詰めを行う。秋冬ねぎは、地温が低下し草勢が回復してきたら本格的な土寄せ、追肥を行う。また、収穫時に黄色斑紋病斑が発生しないよう葉枯病の防除を行う。
- (4) 砂丘地のだいこんでは、は種後10～20日の過剰なかん水により横しま症やへこみ症の発生が懸念されるため、かん水は必要最小限とする。また、生育中期の乾燥は空洞

症や黒芯症等の根部障害の原因となるため適宜かん水を行う。生育後期の風雨で黒斑細菌病の発生が懸念されるため、防除を徹底する。低温・降雨が続いた場合には、わか症の発生が懸念されるため防除を行う。

- (5) たまねぎ育苗では、子葉展開期から第1枚展開までは、葉鞘が細く弱いため立枯病にかかりやすいので、天候を見ながらかん水過多にならないように注意する。1回当たりのかん水はセルトレイの底にしみ出る量とし、気温に応じて1日当たりの回数を調整する。

VI 果 樹

1 栽培管理

- (1) 収穫前の果実肥大最盛期に入ることから、草生栽培園では土壌水分競合をさけるため草刈りを行う。
- (2) 気温の推移により着色の進みが変動することから、着色進度だけを目安とせず、試し切りや糖度調査を行い、収穫遅れとならないよう注意する。
- (3) かき、なし、ももでは徒長枝の整理を行う。特にル レクチエはハウキ枝を必ず整理する。
- (4) 現時点で収穫が終了した品種から、順次樹勢回復を図るため、礼肥を施用する。
- (5) フェーン現象で長時間高温乾燥状態が継続する場合は、露地栽培であっても水分ストレスによる生育停滞や生理障害果の発生が助長されるので、ほ場条件に応じて敷きわらやマルチ等乾燥防止対策を行うとともに、スプリンクラー等かん水設備の点検をして備える。
- (6) 台風や雹・霰などに備えて、防風網・防風林等の点検整備を実施する。

2 病虫害防除

- (1) 露地ぶどうでは晩腐病、べと病の被害果や葉を放置せず、園外で処分する。
- (2) セイヨウナシ褐色斑点病にり病している落葉は可能な限り処分する。
- (3) 健全な葉を長く維持し、収穫後の貯蔵養分蓄積が確実に図られるよう病虫害防除を実施する。特に、日本なしの黒星病、もものせん孔細菌病などの発生園では収穫後の秋季防除を徹底する。

VII 花 き

1 球根類の管理

- (1) チューリップ等球根類の種球の貯蔵にあたっては、通風に留意し、青かびや腐敗等の障害球を随時除去する。
- (2) ユリの球根養成では、長雨や台風等では場が過湿状態にならないよう事前に排水対策を実施するとともに、乾燥が続くようであれば適切なかん水に努める。

2 切り花類、鉢物類

- (1) 曇雨天時の軟弱徒長や高温・強日射による日焼け等障害の発生を防止するため、天候に合わせたこまめな遮光資材のかけ外しを実施する。特にユリ切り花では、9月中旬以降の天候に留意し、遮光資材の除去のタイミングを逸しないよう注意する。
- (2) 気温の変動が大きい時期となるので、施設栽培では天候に応じたこまめな保温や換気など、適切な温湿度管理を実施する。

- (3) 露地切り花ほ場では、長雨や台風等でほ場が過湿状態にならないよう事前に排水対策を実施する。また、少雨で乾燥が危惧される場合は、敷きわらや適切なかん水管理を行う。
- (4) 花しみ障害等の発生を防止するため、切り花の収穫は高温時を避けて涼しい時間帯に行う。また、収穫後は長時間放置せず、できるだけ速やかに冷涼な場所で水揚げを行う。

3 病害虫防除

- (1) 降雨等によりユリでは葉枯病の発生が懸念される。また、トルコギキョウ、ストック等の1年草切り花や鉢物類では灰色かび病等の病害が発生しやすいので、ほ場内の通風を図るとともに、計画的な防除を実施する。
- (2) 高温・乾燥が続くと、ハダニ類、アザミウマ類、オオタバコガ等の害虫の発生が懸念されるので、引き続き防除の徹底に努める。

Ⅷ 畜産

1 家畜の管理

暑熱ストレス等の影響により、疾病に対する抵抗性及び生産性が低下する時期であるため、家畜の栄養状態や繁殖状況などをよく観察し、適切な飼養管理を行う。

- (1) 種付け予定の家畜は畜舎の一番涼しい場所に繋ぐ等、管理をこまめに行う。
- (2) カビの発生した飼料や品質の悪い飼料は家畜に悪影響を及ぼすので給与しない。
- (3) 採食量の低下を防ぐため、飼槽や飲水設備を常に点検・清掃し、良質な飼料やミネラル、新鮮な水の給与に努める。また、飼料は朝晩の涼しい時間帯に給与する。
- (4) 家畜に異常がある場合は早めに獣医師の診療を受ける。

2 飼料作物の管理

- (1) 牧草は、生育停滞及び刈取り適期の逸脱等により収穫量の減収が懸念されるため今後、気象変動に即応した適切な収穫調製と収穫後は速やかに追肥を行い、牧草の再生を促進する。
- (2) 牧草地の更新は、天候を考慮した計画的な作業を進め、山間地域では9月上旬までに、平場地域では9月下旬までには種を行う。
- (3) 飼料用トウモロコシは、排水対策を徹底する。また、生育遅延により登熟の遅れが懸念されるため、収穫に当たっては子実の熟期を確認し黄熟期での適期刈り取りに努める。
- (4) 飼料用稲わらは、天候に留意して十分に乾燥した良質な稲わらを回収する。
また、ロールベール体系で収穫する場合は、生稲わらサイレージとしての収穫調製も組み合わせながら、収集量確保に努める。